

福井県若狭地方における語法の分布とその解釈 (2) ： 敬語助動詞をめぐって

著者	加藤 和夫
雑誌名	和洋国文研究
号	24
ページ	1-13
発行年	1989-03-20
URL	http://hdl.handle.net/2297/30101

福井県若狭地方における語法の分布とその解釈 (二)

— 敬語助動詞をめぐる —

加 藤 和 夫

一 はじめに

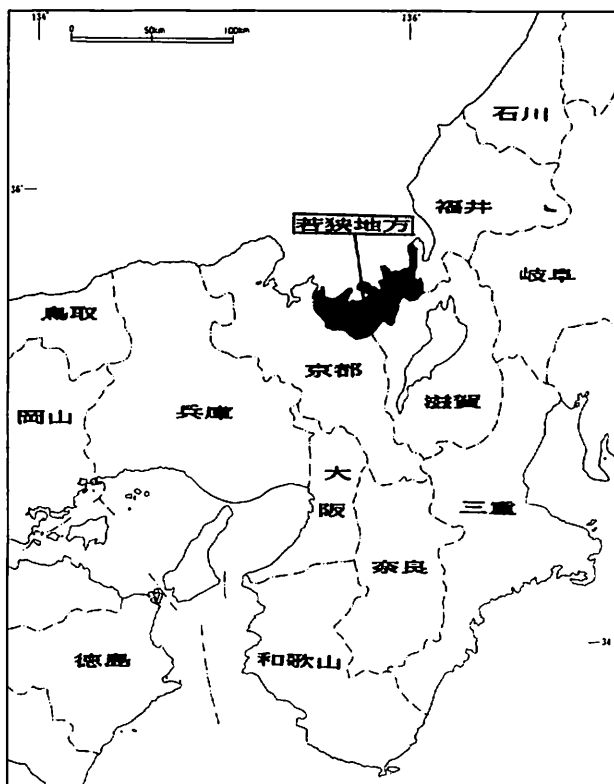
筆者はこれまでも、福井県若狭地方方言の言語地理学的調査に基づき一連の論考を発表してきた。¹⁾ そのうち、調査結果を全体的に概観し、語の分布パターンから若狭地方方言の成立・語の伝播ルート²⁾を考察した拙稿(一九八〇a)「福井県若狭地方における言語分布相——主に語の伝播の観点から——」と、若狭地方方言の言語地理学的調査およびその結果を例として、言語地図の作成方法と言語地図の解釈について述べた拙稿(一九八四)「言語地図の作成と言語地理学的解釈」を除いては、主に語彙の分布を考察の対象としてきたが、最近、拙稿(一九八八)「福井県若狭地方における受身・可能表現の分布とその解釈」ではじめて語法関係の項目について、詳しく言及してみた。本稿はそれに続くものとして、若狭地方の敬語

法のうち尊敬表現に用いられる敬語助動詞の分布について言語地理学的に考察したものである。

調査は一九七六—一九七八年に福井県若狭地方全域(若狭地方に接する滋賀県・京都府の一部を含む)の延べ二四〇地点で、老年層を対象に行なった。本稿で考察の対象とする敬語助動詞の分布は、一九七八年に臨地調査した一〇九地点の資料によるものである。調査地域の概要については、地理的位置は図1、その他は拙稿(一九八〇a)などを参照されたい。

調査から既に十年近く経過し、一日も早く調査結果全体をまとめた解釈付きの言語地図集を公開しなければと思いながら、末だにそれを果たせないでいる者として、このような形で資料を順次公けにしていくなことが調査者としての責任だと考えるのである。

図1 若狭地方の地理的位置



二 若狭地方の敬語法（敬語助動詞）の分布

二・一 近畿方言の中の若狭方言の位置

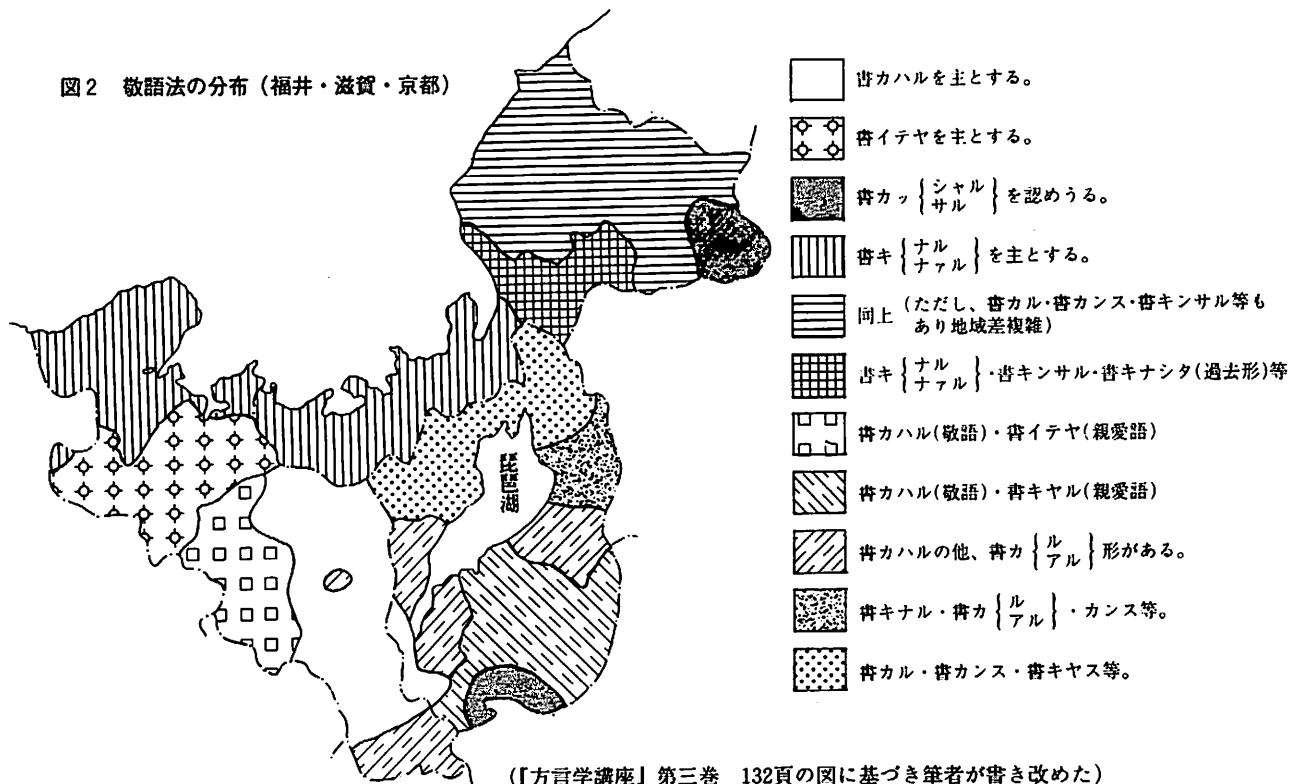
本稿では、後掲の図3・5の三枚の言語地図を主資料として、若狭地方における敬語表現（尊敬表現）における敬語助動詞の分布を明らかにし、あわせてその歴史を考察する。

若狭地方の敬語助動詞に関する従来の報告としては、比較的まとまったものに、佐藤茂「福井県嶺南地方（若狭）方言」の二三八―二四〇頁の記述（煤垣実編「近畿方言の総合的研究」三省堂 一九六二年）がある程度で、その他は断片的な情報があるにすぎない。その断片的情報の一つである奥村三雄「関西弁の地理的範囲」（『言語生活』二〇二 一九六八年）では、若狭方言を、丹波綾部・丹後舞鶴などと同じ北近畿方言の中に含めている。奥村氏はその中で、「本稿における関西弁の地理的範囲は、敬語法書カハル形の分布を最も重視しているが、その他の諸現象の分布領域から見ても、巨視的には大した矛盾がないはずである」としている。筆者自身も、これまでの調査を通じて、巨視的には氏のこの立場を支持するものであるが、ここではその北近畿方言に含まれる若狭方言を徹底的に観察しようというわけである。

図2は、奥村三雄氏作図の福井・滋賀・京都に関する敬語法の分布図であるが、これによれば、先に同氏によって北近畿方言とされた範囲でも、綾部と舞鶴は「書イテヤを主とする」地域であり、若狭地方は西の丹後半島および東の越前地方に同じく「書キナル・書キナルを主とする」地域となっている。いわゆる、若狭方言の非関西弁的とされる一つの所以である。

奥村氏は先の「関西弁の地理的範囲」で、次のように言う。

図2 敬語法の分布（福井・滋賀・京都）



「近畿方言の総合的研究」一四頁などでは、〈若狭方言対京都方言の対立よりも京都方言対大阪方言の対立を上位区分におく〉という考え方が示されるが、下記イ(ハ)の如き若狭方言の非関西方的特徴は重視すべきであろう。(イ) $\text{e} \rightarrow \text{a}$ 等の音変化傾向 (ロ) サ行イ音便話イタ形 (ハ) 敬語法書カハル形なく、書カッシャル・書カンス・書キナル形を使用……(傍線筆者)

右の(イ)―(ハ)のうち、(イ)と(ハ)については今回の調査でもその事象の存在が確認できたが、(ロ)のサ行イ音便については、僅かに一地点(遠敷郡上中町河内653・4852)でしか確認できず、もはや若狭地方では老年層においても消滅の状態に近いことが知られる。

一方、若狭方言が近畿方言下の北辺として非近畿的古態を残していることについては、「喪日本系脈」といった語を用いて藤原与一氏が、「日本語方言上の『喪日本系統線』」(「方言研究年報」5 一九六二年)、「方言学」五〇三―五〇八頁(三省堂 一九六二年)、「方言学の方法」二七二―二八五頁(大修館書店 一九七七年)などで指摘しており、そこでも敬語法における「離近畿性」を大きな特徴の一つとして挙げている。

本稿は、その若狭地方における敬語法(敬語助動詞)の分布を明らかにし、言語地理学的に考察しようとするものである。

二・二 若狭地方の敬語助動詞の分布

本稿で考察の対象とする図3―5の三枚の言語地図は、若狭地方

の一〇九地点の老年層話者から、以下の質問によって得られた回答を、そこに使用されている敬語助動詞に注目して描いたものである。同一地点で複数の敬語助動詞が敬意を違えながら併用されている場合が多いので、地図が煩雑になるのを避けるために、敬語助動詞の種類により三枚に分けて示した。

〈質問文〉

道で人に会って、相手に「どこに行くのか」と行き先を尋ねる場合、相手によっていろいろ違った言い方をするとありますが、その時の言い方を、この土地のことで丁寧な言い方からぞんざいな言い方まで順に教えてください。

では、まず図3から見ることにする。図3は、敬語助動詞ナル・ナサル・ハルなどの分布を示したものである。

このうち、先の図2でも明らかとなっており、丹後地方にも分布するナルがイキナル(イキナル)の形でほぼ全域に分布している。その使用は、老年層では今なお盛んである。

国語史的にナルの成立をみると、例えば小学館『日本国語大辞典』「なる」の項では、「なさる」から「なはる」「なある」を経て変化した語と説明している。用例から見ると近世以後の成立と思われる。このこととの関連でいうと、図3で分布するイキナサル・イキナハルは、ナルに変化する前のナサル・ナハルの残存と解釈されそうである。ただ、イキナサル・イキナハルについては、敬意においてイ

キナルより高いものと一般的に意識されており、その関係で実際には使用されている地点でも話者によって高い敬意の（しかも古い形式と考えられる）ナサル・ナハルを答えていない可能性も考えておくべきかもしれない。しかし、その点を考慮に入れたとしても、東の三方郡美浜町や西の大飯郡にややまとまった分布があり、また辺境の小浜市上根来（6513・4282）にもこの類が分布することは、若狭地方にもナルの分布以前にナサル・ナハルが広く分布していた歴史を考えるとよさそうである。そしてさらに、イキナルと同系の符号を与えたイキナール（大飯郡高浜町の四地点）は、国語史にいう「なざる」から「なはる」そして「なある」から「なる」へ変化する過程の「なある」にあたるものとみることができよう。

イキハルのハルは、分布が滋賀県との県境に近い一地点および滋賀県側の一地点にしか見えないことから、京都を中心に分布する新しい勢力の先陣が、老年層においてはようやく滋賀県湖西を経てここまで達したことを示していると解釈される。ただ、ここでのハルは京都式のイカハルでなく、大阪式のイキハルであることに注意したい。ハルという新しい敬語形式は受け入れたが、動詞への接続はナサル・ナハル・ナルなどの場合と同じ形を保っている不安定な状態とみることができようか。今後このハルがどの程度若狭地方に分布を拡げるか、現在若い世代での使用状況はどうであるか、この点は是非追跡調査してみたいところである。

次に図4で敬語助動詞ツシャルとンスの分布をみる。

今回の調査では、質問文の関係で五段動詞「行く」に接続するも

のしか確認できなかったもので、図4にはツシャル（上中町河内6513・4282のイカサルのサルはツシャルからの変化）とンスしか現われていないが、これらの助動詞は前接の動詞の種類によって形態が異なるようである。

ツシャルの場合は、五段・サ変活用にはツシャル、下一段・上一段・カ変活用にはヤツシャルあるいはサツシャルとなる。藤原与一氏の報告によれば、小浜市堅海（6502・7806）では次の例のごとく、上一・下一に対してそれぞれサツシャル・ヤツシャルが用いられるという。

・ オッサナ イマ オキサツシャッタモンデ オツトメノ
トア スル（和尚さんが今起きなさんで朝のおつとめの音がする）

・ オッサン ネヤツシャッタ（和尚さんは寝なさんで）
なお、『わかさ名田庄村誌』（名田庄村 一九七一年）の「方言」（四四六―四六七頁）では、ツシャルの他にはヤツシャルのみが報告されている。

ンスの場合は、五段・サ変活用にはンス、上一段・下一段活用にヤンスあるいはサンスとなる。ヤンス・サンスについても、名田庄村ではヤンスのみ、小浜市堅海ではヤンス・サンスの両形が報告されている。

ちなみに『わかさ名田庄村誌』（四四九頁）によれば、ツシャル・ヤツシャルとンス・ヤンスの活用は次の表のようであるという。

表1 ッシャル(ヤッシャル)の活用

見	書か	
ヤッシャルエ(ん)	ッシャルエ(ん)	未 然
ヤシ(た)	シ(た)	連 用
ヤッシャル	ッシャル	終止・連体
ヤシ(たら)	シ(たら)	仮 定
ヤッシャルエ	ッシャルエ	命 令

表2 ンス(ヤンス)の活用

見	書か	
ヤンセ(ん)	ンセ(ん)	未 然
ヤンシ(た)	ンシ(た)	連 用
ヤンス	ンス	終止・連体
ヤンシ(たら)	ンシ(たら)	仮 定
ヤンセ	ンセ	命 令

さて、あらためて図4を見ることにしよう。

イカッシャルとイカンスの分布域からみて、ッシャルとンスの新古関係については、ッシャルの方が古いと解釈される分布状態を示している。と同時に、ッシャルはナルより古いともいえそうである。

かつては、若狭地方全域にッシャル(ヤッシャル・サッシャルを含め)が分布していたと考えられる。ンスはッシャルの分布域の内側に、しかも平野部を中心に分布しており、ッシャルよりも新しい分布勢力であることは間違いないと思われる。若狭東部の三方郡にごく僅かの分布しかみえないこと、若狭地方のかなり広い範囲に分布するものの、名田庄村東部と小浜市西南部に連続してかなりまとまった分布の空き間があることなどからみて、ンス(ヤンス・サンスを含め)は、ッシャル、さらにナルが伝播した後に、西では京都舞鶴方面を経て大飯郡へ、京都美山町を経て名田庄村へという二つの経路で、東では滋賀県湖西地方を経て小浜市・上中町へ、それぞれ伝播したものと解釈される。

若狭地方の分布からみたッシャルとンスの歴史的新古関係(ッシャル・ンス)は、両者の全国的な分布状況からも、文献国語史の上からも裏付けられる。

まず、全国的な分布状況については、藤原与一氏の「昭和日本語方言の総合的研究 第一巻 方言敬語法の研究」(春陽堂 一九七八年)第五章二八七―三八九頁、および附図の第六・七図によって知られる。それによれば、ンスは若狭地方を含めて近畿の周辺部(三重・和歌山ではかなり広い分布)に分布するほかは、東で東北の秋田・岩手・福島、佐渡や能登半島などに僅かに、また西では四国の徳島(中国地方でも点々と)あたりに分布する程度である。それに対しッシャルは、東では東北の岩手南部から連続的に関東(点々と)・中部・北陸地方にかけて広い範囲に、さらに西でも中国地方

若狭地方言語地図

Linguistic Atlas of Wakasa Area

調査時期 1974(昭.55)10.1-1975(昭.56)10.31

調査員 加藤 和夫
Kazuo Kato

どこに行くのか〈敬語法①〉

ナサル・ナハル・ナル・ハルの分布

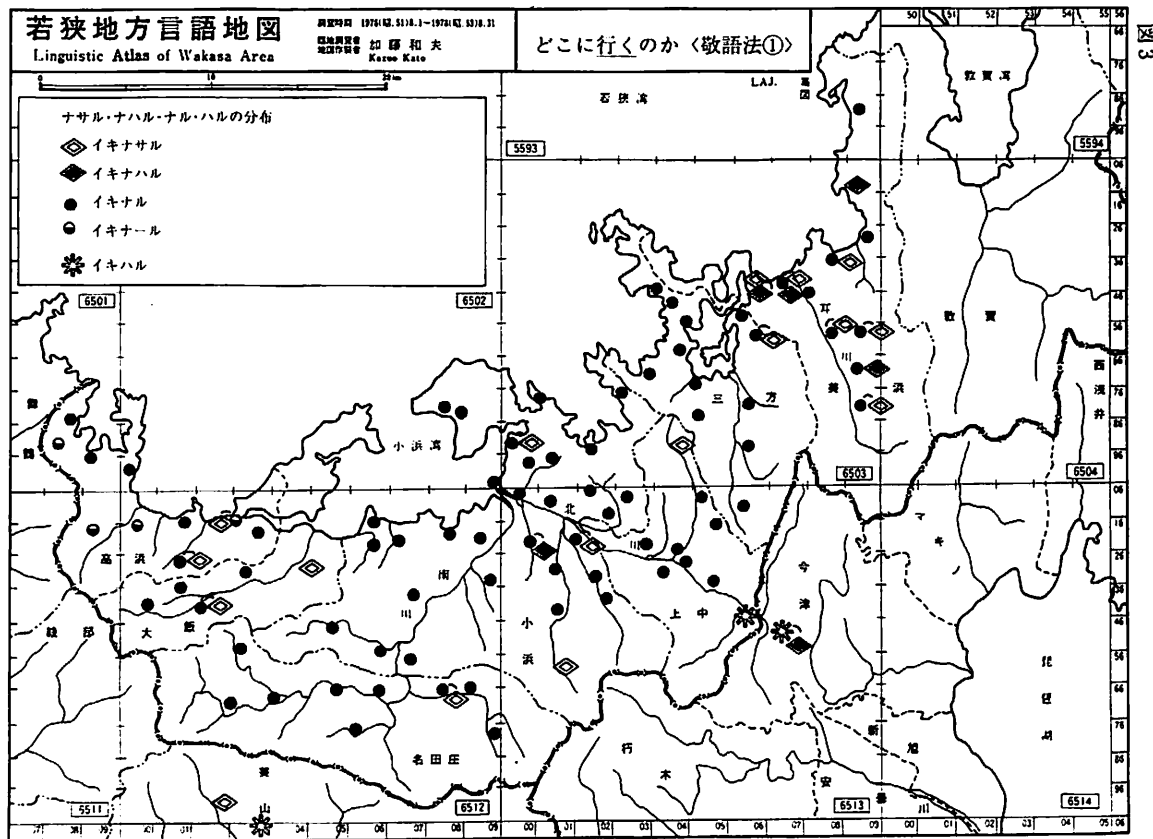
◇ イキナサル

◆ イキナハル

● イキナル

● イキナル

✳ イキハル



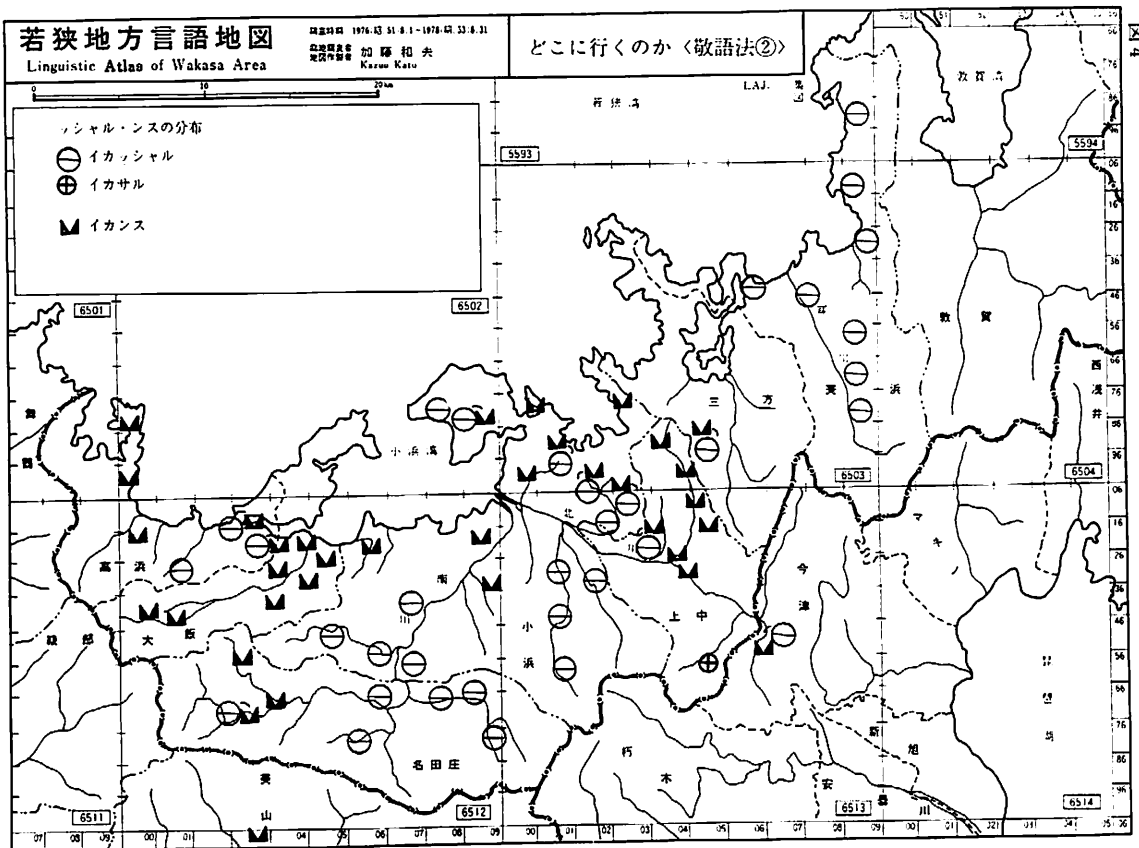
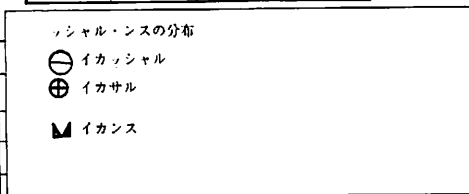
若狭地方言語地図

Linguistic Atlas of Wakasa Area

調査時期 1976.4.31 5.1 - 1978.4.30 5.31

調査協力者 加藤 和夫
Kazuo Kato

どこに行くのか〈敬語法②〉



若狭地方言語地図

Linguistic Atlas of Wakasa Area

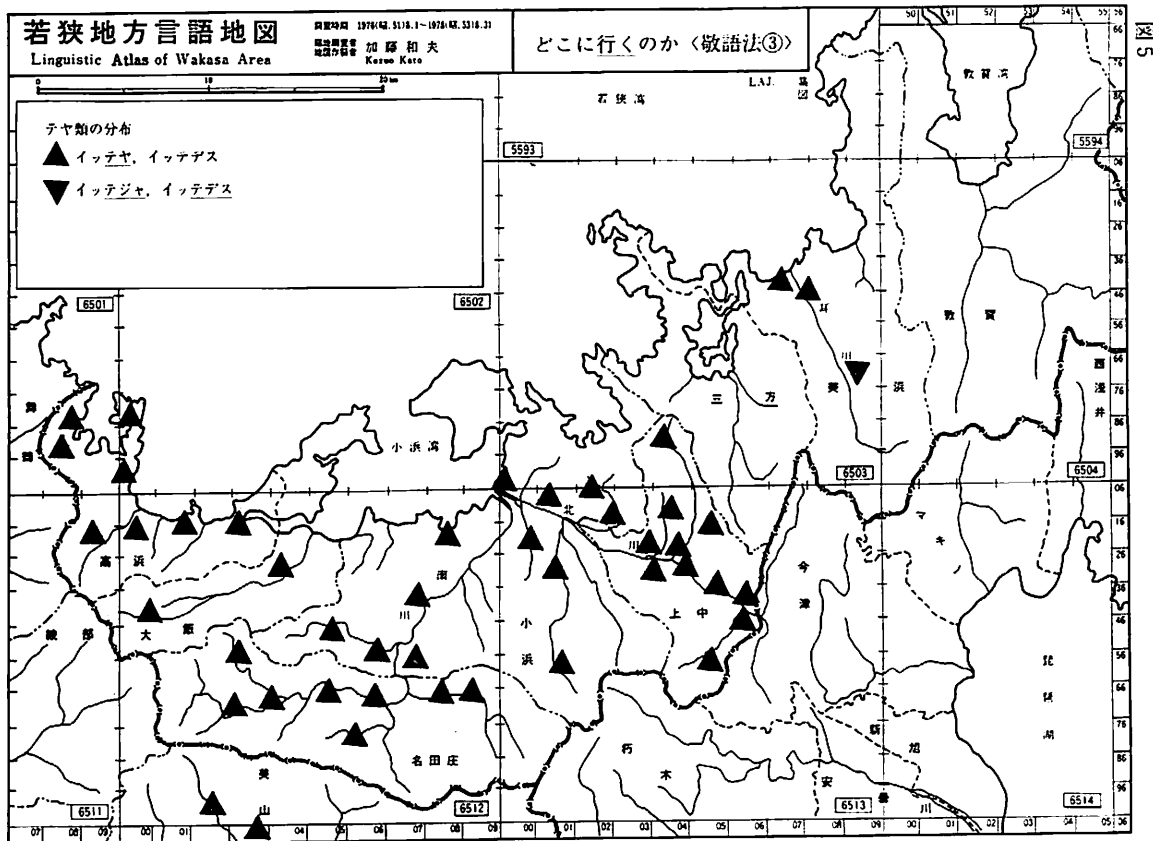
調査時期 1976(42), 51(16), 1~1978(42), 53(16), 31

調査担当者 加藤 和夫
Kazuo Kato

どこに行くのか〈敬語法③〉

テヤ類の分布

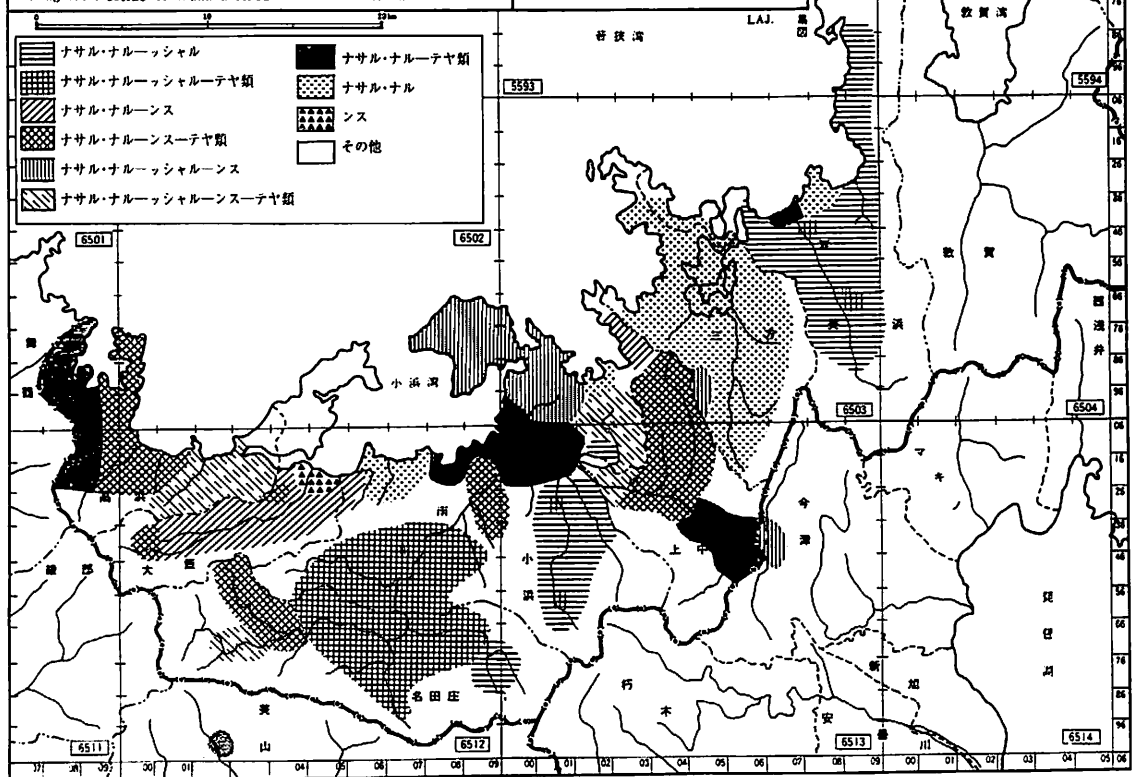
- ▲ イッテヤ, イッテダス
- ▼ イッテジャ, イッテデス



Linguistic Atlas of Wakasa Area

加藤和夫
Kame Kato

敬語助動詞—併存のタイプ—



(日本海側にまとまった分布)や九州西部(福岡・佐賀・長崎・熊本)を中心に広い範囲に分布している。いわゆる周圍論的解釈によつてツシヤルの方がンスより古いと考えられる。

では文献國語史上はどう考えられているのか。例えば、佐藤喜代治編『國語學研究事典』(明治書院 一九七七年)の三二八頁では、「しゃる」と「んす」の成立につき次のように説明している。

中世末に「す・さす+らる」の「せらる」「させらる」から転じた「しゃる」「さしやる」が現れ、近世上方語では四段動詞・ナ行変格動詞に「しゃる」、その他の活用動詞に「さしやる」が下接し、未然形が一音節の一段動詞の場合は、湯沢幸吉郎によれば、「さしやる」の転かとされる「やしやる」が下接した。(中略)。また、「しゃります」「さしやります」「やしやります」の転じた「しゃんす」「さしやんす」「やしやんす」が近世前期に発生し、初めは遊女ことばであったものが、元禄期には一般女性も用いるに至つた。「しゃんす」「さしやんす」「やしやんす」から転じた「んす」「さんす」「やんす」もこの期の遊女や、また一般女性にも用いられている。後期上方語では男性語として用いられているが、後期江戸語では遊里中心のことばであった。(佐藤武義)

(傍線筆者)

右の記述も、先に図4から推定したツシヤル・Vンスの歴史に一致する。そして、これによれば、「しゃる」と「んす」が上方語として定着した時期には、ほぼ一五〇年余りの隔たりのあったことが推定される。

なお、待遇の意味(敬意)との関連では、若狭地方に分布する敬語助動詞³は、相手のごく親しい人の場合にのみ用いられ、いわゆる親愛語的性格を担っていることがわかつた。一方、ツシヤルの待遇の意味には個人によるゆれが大きく、はっきりしないが一般的傾向としてはナルよりもやや上か同程度の敬意をもつようである。

図5はテヤ類(テデス・テヤ)の分布である。テヤは図2からもわかるとおり、京都の口丹波から丹波地方にかけて強い勢力をもつものである。この類が若狭地方にどの程度用いられているかは、調査前から興味あるところであつたが、結果は予想以上に広い範囲に及んでいることがわかつた。図3で僅かにみえたハルを除けば、この類が当該地域における尊敬の助動詞の中で最も新しい勢力であることは疑いなく、高浜町の西の舞鶴市および名田庄村の南の美山町から、ナルの分布を脅かしつつ伝播し、さらに小浜を中心に分布を拡大したものと考えられる。しかし、老年層においては、ナル・ツシヤル・ンスといった旧勢力が今も根強く使用されているために、新勢力テヤ類は当方言の待遇表現体系の中に未だ確固たる地位を占めてはいないようである。敬意としては一般的に、テデスがナルよりも高く、テヤはナルと同程度かやや低く意識されている。また、その使用頻度はテヤよりもテデスのほうが高いらしい。

さて、ここまで触れてきた敬語助動詞は、当然のことながら一地点で一つの形式というのではなく、それぞれの地域における敬語体系(待遇表現体系)の中で、敬意や使用頻度を違えるなどして、複数のものが併存している場合が多い。図6では、図3・5を重ね

合わせる形で、敬意差や使用の多少等の情報を捨象して、その併存のタイプの分布を略図化して示したものである。参考として見られたい。

では最後に、近隣地点の話者からの情報としては聞きながら、当該地域に臨地調査した際には聞き得なかった（従って図3-5にも載せなかった）敬語助動詞ル・ヤルについて、簡単に言及しておきたい。

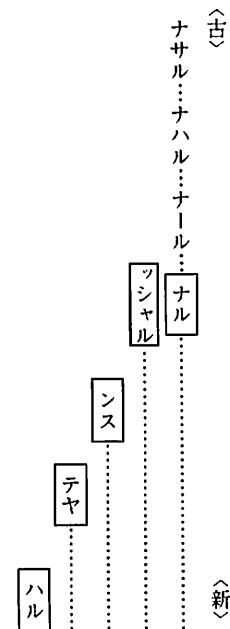
調査中、今回の質問文の答えに相当する尊敬表現としてイカルという言い方が名田庄村の中央部にあるとの情報を、近隣地点の数名の話者から得た。また、「わかさ名田庄村誌」（四四九頁）にも名田庄村の中央部に「書カル」「見ヤル」等の表現が存在するとある。ところが、なぜか今回の調査では当該地域でその形を確認できなかった。筆者の調査方法に問題があったのか、話者に問題があったのか、あるいはかつては確かに分布したが既に使用されなくなってしまったのか、理由ははっきりしない。

ちなみに、ル・ヤルは図2によれば滋賀県、特に湖東に広く分布するもので、なぜ名田庄村の中央部に言語島のように分布するのか（分布したのかと言うべきか）解釈が難しい。「わかさ名田庄村誌」には、名田庄村東部の木谷（6512・6302）にもル・ヤルが稀に聞かれるとあるので、かつては名田庄村に広く分布していたものであろうか。「近畿方言の総合的研究」の「近畿方言総説」（四〇頁）で模垣実氏は、この系統（ル・ラル系）を近畿方言の敬語（尊敬の）助動詞の中で最古のものではないかとしている。

三 おわりに

以上、福井県若狭地方方言における敬語助動詞、中でも尊敬表現を担う助動詞について、そこで用いられている形態とその分布状況を報告し、それらの歴史を言語地理学的に考察してきた。

ここで、あらためてそれぞれの助動詞の新古関係を整理しておくならば、次のようになろう。



若狭地方方言を含む近畿方言は、日本語諸方言の中でも敬語表現を中心とした待遇表現の運用を採る上で極めて重要な地域と考えられる。共通語に限らず方言においても、社会構造の変化にともなう待遇表現体系の変容や敬語形式の簡略化などが言われる今日、本稿を一つの足がかりとして、今後さらに当該方言および周辺方言における待遇表現の運用の実態をより詳細に討究していきたいと考えている。

注1 加藤和夫(一九八〇a)「福井県若狭地方における言語分布

相―主に語の伝播の観点から―」(『都大論究』第一七号 東京都立大学国語国文学会)

――(一九八〇b)「詞章を対象とした言語地理学―若狭地方の蛭とり歌の場合―」(佐藤茂教授退官記念 論集国語学) 桜楓社)

――(一九八二)「囲炉裏の座名体系の分布と変遷―若狭地方の囲炉裏をめぐる語彙―」(『都大論究』第一八号)

――(一九八二a)「周囲分布と方言周囲論―分布に探る「つらら」方言の音韻変化過程―」(『国語国文学』第二三号 福井大学国語国文学会)

――(一九八二b)「若狭地方における家族呼称の分布とその変遷」(『日本語研究』第五号 東京都立大学日本語研究会)

――(一九八三)「福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布」(『人文学報』第一六〇号 東京都立大学)

――(一九八四)「言語地図の作成と言語地理学的解釈」(加藤正信編「新しい方言研究」 至文堂)

――(一九八八)「福井県若狭地方における受身・可能表現の分布とその解釈」(『論集 ことば』 東京都立大学人文学部国文研究室)

2 国立国語研究所が「日本言語地図」作成に際して用いた方言調査基礎図システムにより地点に与えた八桁の地点番号である。以下、本稿中地点名の下に付した八桁の数字も同様。地点

番号の決め方については、(注1)の拙稿(一九八四)でも詳しく説明した。

3 滋賀県杉山(6513・4724)の話者は、大阪での居住歴がある。その影響も考えるべきかもしれない。

また、今回の調査では使用が確認できなかったが、「わかさ名田庄村誌」四四九頁によれば名田庄村坂本でハル(ヤハル)が書カハル・見ヤハル・シヤハル・キヤハルのような形で稀に用いられるとある。しかし一方で「子供・青年の間では用いられず、そのことばの存在さえ知らないものもある」とあり、老年層での稀な使用というのは、京都などのハル地域に居住歴を持つ人の個別的現象とみるべきだろう。筆者の調査時点でも、名田庄村にはまだハルは定着していなかったと考えたい。

4 テヤはテ(接続助詞)・ヤ(指定・断定の助動詞)と解釈されるものであり、テアスはテヤのヤを丁寧の助動詞のデスに変えることでさらに高い敬意を表わそうとしたものである。また、図5で一地点のみ分布のみえるテジャのジャは、その地点の指定・断定の助動詞ジャの分布に対応する形で現われている。

歐陽詢三十六法の考察(二)

〈原文〉 十 覆蓋

如寶容之類。點須正。畫須圓明。不宜相著與上長下短也。

〈訓読〉

寶容の類の如し。點は須らく正しかるべし。畫は須らく圓明なるべし。相著くと上長く下短きとに宜しからず。

〈大意〉

覆はおおうこと。蓋はかぶさること。

寶容の字のように、上部がおおいかぶさるような字は、点（ハの第二画）は立てること。画（ハの第三画）はまるみをもつて明確に、すっきりと書くこと。もしハと内部との間が相著くような結体をとると覆蓋の法に合致せず、構成上よくない。

〈備考〉

寶

李淳は「上蓋大なるものは天覆といい、その法は上面（上の部分）が下面（下の部分）を蓋い盡すを要す。書くとき

福 島 肇

宇

宮

は、天^{そら}清^{きよ}て（上部を細めに明るく）下^{した}濁^{にご}る（下部を太めに書く）べし。宇宙^{うちう}宮官^{きうくわん}是れなり」ととく。漢溪は「覆蓋とは、人の宮室（家）の上より覆うが如し。宮室は其の高大なるを取る（ハの方が大きくなければならぬ）故に下面（呂至）の筆畫（線）は相着くは宜しからず（ハと呂の間、ハと至の間は広い方がよい）左右（ハの左右の部分）の筆勢は意能く容れてこれを覆い盡すなり（中のあるものをよくおおい、上からすっきりかぶさる）ハは説むこと綿^{わた}の若し」と。また、「説文」に曰く、「交し覆いたる深屋（奥深い家）なり、象形の義なり」ととく。

〈私見〉

要は下部が上部の下に調和よく位置し、抱かれているような結構がよいのである。字には、それぞれにポーズがあり、そのポーズはそれぞれ人によつて異なる。そこに造形上の個性があり、観る者を樂しませる要因がある。もちろん、書は造形上のポーズのみでは成立